

日本語心理動詞文のスル/ナル表現の選択に見られる 中古から現代にかけての事態把握の変化

大槻くるみ・上原聡 (東北大学)

1. はじめに

現代日本語はナル言語と呼ばれ、動作主よりも状況全体の変化に焦点を当てたナル表現を好んで用いるが、英語は状況における個に着目し、その行為に焦点を当てたスル表現を多用するとされている(池上 1981)。このようなスル/ナル表現の使用に関しては、これまでは主に日本語と英語のような類型が異なる言語を対照させて通言語的に論じられてきた。一方で、日本語の同一言語内における事態把握の通時的な変化に関してはまだ十分に研究されておらず、その数少ない研究の中には池上(2012)と西光(2012)があるが、その日本語の客観的把握の通時的変化に関する見解は分かれている。¹

そこで本研究では、従来、ES(experiencer-subject)型とEO(experiencer-object)型という2つの型の対立で分析され²、スル/ナルという対立の分析にも適していると考えられる心理動詞文において、スル/ナル表現が選択される割合の増減を中古、近代、現代の3つの時代で比較する。³それによって、中古から現代の各時代の日本語話者が、心的変化の原因に焦点を当てる事態把握であったのか、もしくは、経験者の意識に焦点を当てた事態把握であったのかを探り、中古から現代にかけて日本語における事態把握の仕方が通時的にどのように変化したのかを明らかにする。

2. スル/ナルの定義

2.1 池上(1981, 2006)によるスル/ナルの定義

池上(1981, 2006)によると、同じ事態を表すにも、日本語話者は自動詞好んで用い、事態の起因の存在にあえて言及しない。英語話者は他動詞の受動態を用いることで、起因を明確に言語化する。

(1) (戦死した人のことを話題にして)

英語: "He was killed in the war."

→他動詞の受動態を用いることで、加害者の関与が暗に言及されている。

日本語: 「彼は戦争で死んだ。」

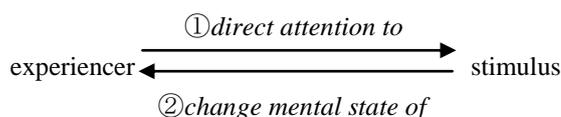
→自動詞を用いることで自然に「死んだ」かのように表現し、加害者の関与にあえて言及しない。

日本語では自動詞のようなある出来事の原因に言及しない表現であるナル表現を好んで用いるのに対し、英語では動作の対象に変化を与える他動詞によって、出来事の原因を明確に示す表現であるスル表現を好んで用いるとされている。

次節では Croft(2012)が論じた心的事象特有の双方向エネルギー伝達を用いて、心理動詞文におけるスル/ナル表現を定義する。

2.2 心理動詞文におけるスル/ナルの定義

Croft(2012:233)によると、心的事象には以下のような双方向のエネルギー伝達がある。一方は experiencer(経験者)が stimulus(刺激)である対象に対して意識を向けるもので、もう一方は刺激が経験者の心的状態を変えるものである。Croft は、心理動詞は人間から対象物への一方通行の働きかけではなく、経験者と対象物との間の双方向のやり取りを表すという点で特異であると論じている。



(Croft(2012:233)を一部改編)

図1 心的事象の双方向性

1つの心的事象が起こる時、経験者と刺激の間では図1のような双方向的なやり取りが起こるが、認知主体が①のエネルギー伝達の方が強いと捉える場合は、経験者が刺激を感情の対象と捉え、これに意識を向けて主体的に評価することで感情を変化させるため、経験者が主語、刺激が補語(ニ格)および目的語(ヲ格)で表される自動詞文および感情の対象を目的語にとる他動詞文が選択される。そのため、①の伝達に焦点がある文はナル表現であると言える。この場合、刺激は感情を変化させる原因というよりは、感情の対象と捉えられるため、この事態把握は経験者の意識に焦点がある。逆に、②のエネルギー伝達の方が強いと捉えられる場合は、刺激が経験者に働きかける構造になるため、刺激が主語で、変化の対象(経験者)を目的語にとる自/他動詞の使役文になる。そのため、②の伝達に焦点がある文はスル表現であると言える。この場合、刺激は経験者の感情を変化させる原因として焦点が当てられるため、この事態把握は原因に焦点がある。

以上のことから、本研究では、経験者から刺激に向かう意識のエネルギーの方が強いと捉えられている経験者の意識が焦点の構文をナル表現、刺激から経験者への働きかけのエネルギーの方が強いと捉えられている原因が焦点の構文をスル表現と定義する。

3. 研究の対象と方法

研究対象とする動詞は、中古は宮島編(1969)『古典対照語い表』、近代は代表的な作品や作家の全集の総索引⁴、現代は国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』語彙表の短単位語彙表データにおいて出現頻度の高い心理動詞を調べて決定した。その結果、以下の心理動詞を研究対象とすることにした。

- ①総索引やコーパスにおいて出現頻度が高かったものの中で、実際のデータ収集においても100以上のデータが集まった心理動詞「飽きる」「驚く」「喜ぶ」を各時代100例
- ②総索引やコーパスにおいて出現頻度が高かったが、実際に収集したデータでは数が100に満たなかった心理動詞「悩む」を50例

そして、本研究では以下のコーパスを用いて、研究対象の心理動詞の語根で検索にかけた。話し言葉が基盤であるひらがな文(山口 2006:80)をデータとした中古以外は、書籍や新聞および雑誌記事でも話し言葉の性質が強い発話・心話部分から各時代350ずつの例文を、検索で表れた上部から順に抽出した。

- 中古：『現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言』
- 近代：『太陽コーパス』、『近代女性雑誌コーパス』、『青空文庫』
- 現代：『現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言』

文例は前節で提起したスル/ナルの定義に基づいて、以下のように分けて収集した。

A. スル表現：

- ・刺激が主語で、変化の対象(経験者)を目的語にとる自/他動詞の使役文
- ・刺激がヲ格で表される経験者及び経験者の身体部位・心などに変化を引き起こす表現
 - ①自動詞の使役形—「飽きさせる」「驚かす(せる)」「困らす(せる)」「悩ます(せる)」
 - 例) 本当におまえは、俺を驚かせるようなことばかりするな
(藤村裕香『悪魔なあいつにちょっと love』)
 - ②感情の対象を目的語にとる他動詞の使役形—「喜ばす(せる)」
 - 例) 死んだお父さんを喜ばせるのだよ
(夢野久作『ルルとミミ』)
 - ③<(刺激)が+(経験者の身体部位・心など)を+(心理動詞)させる>
 - 例) それにどうして盲目になったか、それが大変当人の神経を悩ましていたと見えてね。
(夏目漱石『行人』)

④<(経験者)が+(経験者の身体部位・心など)を+(心理動詞)させる>

例) いや、僕も不断なら、かう神経を悩ましはしないのだが…………

(長田秀雄『戯曲 生きんとすれば—二幕—』)

B. ナル表現：

- ・経験者が主語、刺激が補語(ニ格)および目的語(ヲ格)で表される自動詞文および感情の対象を目的語にとる他動詞文
- ・経験者がニ格およびヲ格で表される刺激を感情の対象と捉え、これに意識を向けて主体的に評価することで感情を変化させる表現

①自動詞—「飽きる」「驚く」「困る」「悩む」

例) 毎日々々柴刈りに来て、よく飽きないことねえ。

(宮原晃一郎『豆小僧の冒険』)

②感情の対象を目的語にとる他動詞—「喜ぶ」

例) ああ、そうだね。ママ、喜ぶよ、きっと

(梨木香歩『西の魔女が死んだ』)

これらの表現の使用比率の変化を調べ、構文選択に表れる各時代の、原因に焦点があったのか、もしくは経験者の意識に焦点があったのかという事態把握の違いを明らかにする。

4. データの集計結果と分析

本研究では、コーパスによって研究対象の心理動詞の文例をスル/ナル表現合わせて各時代 350 例集めた。以下の表 1 および図 1、2 は、中古・近代・現代の心理動詞文におけるスル/ナル表現の使用のデータ集計結果である。

	中古		近代		現代	
	ナル	スル	ナル	スル	ナル	スル
飽きる	100	0	97	3	98	2
驚く	95	5	96	4	94	6
喜ぶ	99	1	90	10	88	12
悩む	40	10	20	30	46	4
計	333	17	303	47	326	24
%	95.5%	4.5%	87.5%	12.5%	93.6%	6.4%

表 1 中古・近代・現代におけるスル/ナル表現の使用

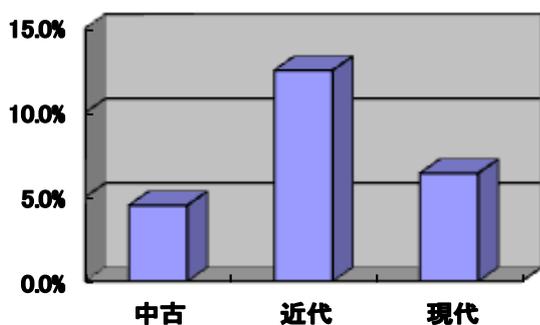


図 2 中古・近代・現代におけるスル表現の使用

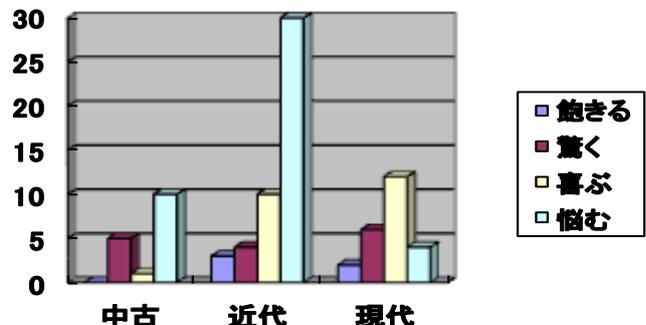


図 3 中古・近代・現代における各心理動詞のスル/ナル表現の使用

図2でスル表現の使用の変化の全体像を見れば、中古から近代にかけて約3倍に増加しているが、近代から現代にかけては約2分の1に減少している。さらに図3で動詞ごとに見ると、「飽きる」と「驚く」はどの時代もその使用に大きな違いはない。「悩む」は中古と現代でスル表現の使用に大きな違いはないが、近代ではその使用が大幅に増加している。これはすなわち、「悩む」という心理変化においては、近代ではその変化を及ぼした原因に焦点が当てられる傾向にあったことを表している。また、「喜ぶ」は中古ではスル表現の使用が少ないが、近代と現代ではその使用が増加している。このことから、中古から近代・現代にかけて「喜ぶ」という心理変化は、経験者の内的要因から、何らかの外的要因によって引き起こされると捉えられる傾向に変化したことがわかる。これらのことから、これまで日本語の変化は、上代から現代への一方向的な変化として捉えられることが多かったが(池上 2012, 西光 2012)、その変化は動詞(出来事)によって異なるということがわかった。

5. おわりに

本研究では、中古、近代、現代の資料を用いて心理動詞文におけるスル/ナル表現の割合を比較し、構文選択が2つの時代でどのように異なり、その違いが浮き彫りにする事態把握の通時的な変化を考察した。今後は研究対象とする動詞や使用するデータベースを追加し、データを増やしてより詳細な分析を行いたい。

注

1. 西光(2012)は、万葉集の時代の日本語は現代よりも客観的把握であった可能性があると考え、逆に池上(2012)は、『万葉集』では<われ>が時に<われら>をも指している自己と他者の境界が曖昧であったことなどから現代よりも主観的把握であったと論じている。
2. 三原(2000:54)によるES型とEO型の心理動詞文の例は以下の通りである。
 - (a)ES型 この子が雷を怖がる。
 - (b)EO型 雷がこの子を怖がらせる。本研究では(a)ES型と(b)EO型の対立をナルとスルの対立に当てはめて分析する。
3. 話し言葉により近いデータを集めるにあたって、上代は散文資料がなく、中世・近世は現在データ収集を進めているが口語体の資料が文語体の資料に比べてかなり少ないことから、他の時代と同じ動詞で多数のデータを収集するのが困難であるため、中世・近世は今後の課題として、本研究で研究対象とする時代は、中古、近代、現代とした。
4. 『作家用語索引 芥川龍之介』、『作家用語索引 森鷗外』、『たけくらべ総索引』

参考文献

- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』大修館.
池上嘉彦. 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚 <ことばの意味>のしくみ』日本放送出版協会.
池上嘉彦. 2012. 「日本語話者好みの事態把握のスタンスとしての<主観的把握>」言語と(間)主観性研究フォーラム in 仙台「ラネカーの視点構図と(間)主観性」研究発表要旨.
西光義弘. 2012. 「7. 日本語における認知過程の変化の可能性」『認知スタイルと言語類型』くろしお言語大学塾: http://www.gengoj.com/seminar/view.php?seminar_list_id=8#post_110.
三原健一. 2000. 「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8, 54-75.
山口仲美. 2006. 『日本語の歴史』岩波書店.
Croft, William. 2012. *Verbs: aspect and causal structure*. Oxford University Press: Oxford, UK.

資料

- 近代作家用語研究会, 教育技術研究所編. 1985. 『作家用語索引 芥川龍之介』教育社.
近代作家用語研究会, 教育技術研究所編. 1985. 『作家用語索引 森鷗外』教育社.
鶴岡昭夫編. 1992. 『たけくらべ総索引』笠間書院.
宮島達夫編. 1969. 『古典対照語い表』出版地不明.

コーパス

- 青空文庫: <http://www.aozora.gr.jp/index.html/>
近代女性雑誌コーパス(国立国語研究所): http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/woman-mag/
現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言(国立国語研究所): <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>
現代日本語書き言葉均衡コーパス『中納言』(国立国語研究所): <https://maro.ninjal.ac.jp/login>
国立国語研究所編. 2005. 『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース—』博文館新社.